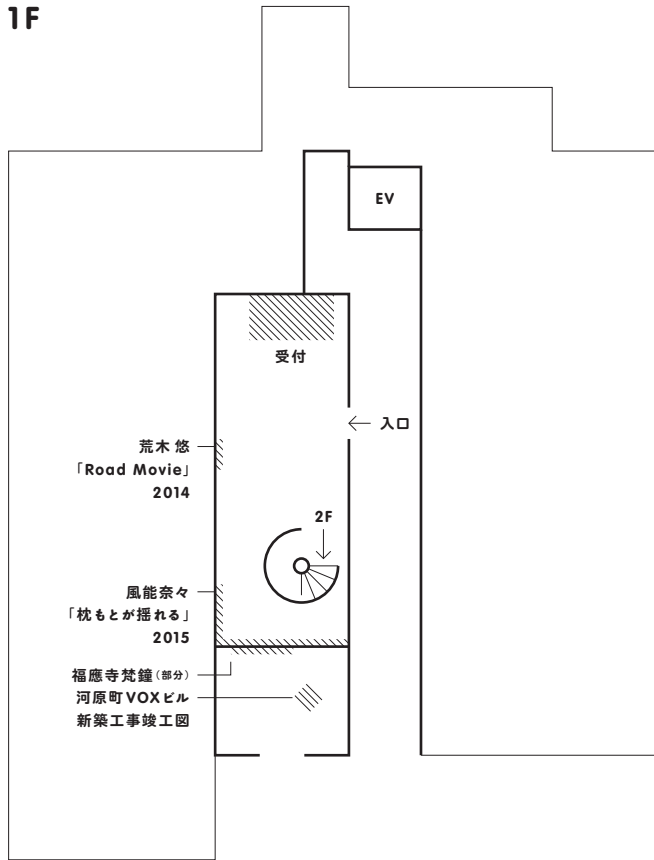
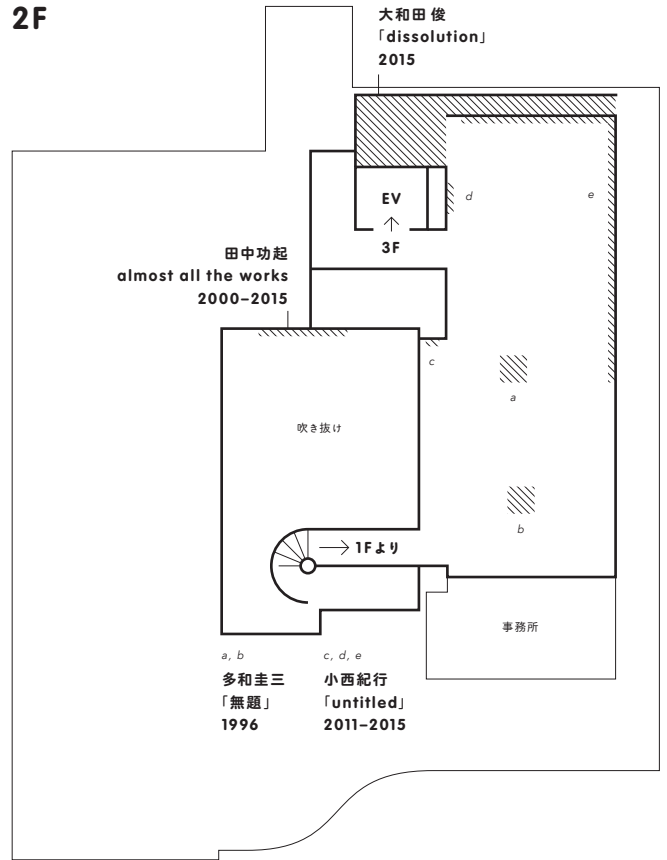


ご鑑賞に際してのお願い：会場内、作品はすべて写真撮影が可能です（動画撮影は不可）／作品にはお手を触れないでください／一度入場された方はこの会場マップをご提示いただくと、当日中に限り何度でも再入場が可能です／「パレ・ド・キョート」へお越しの際は、この会場マップをお持ちください。500円引きとさせていただきます／ご不明な点はスタッフにお声かけください

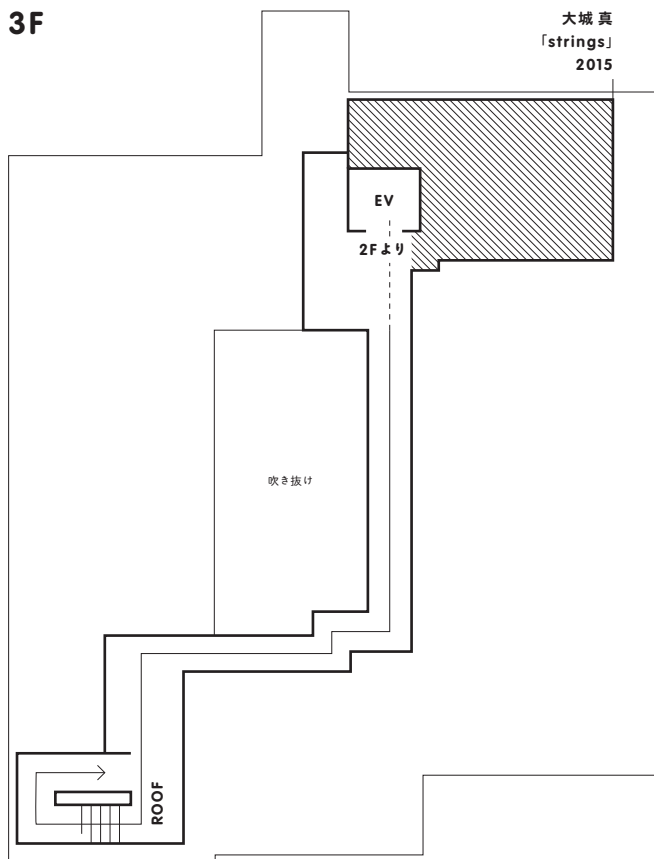
1F



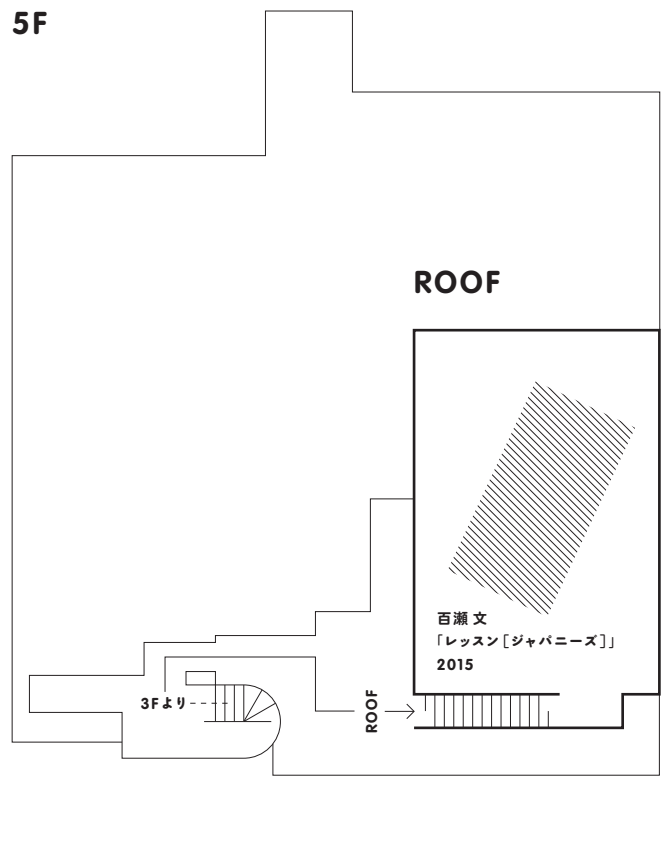
2F



3F



5F



荒木 悠 ARAKI, Yu

「私、機械は、私ひとりだけが見ることのできる世界を諸君に示す。」
——ジガ・ヴェルトフ

荒木ら一行は、メニューにアメリカの地名がついたレストランにおいて、黙々と全メニューの「完食＝完走」を試みる。ユーモラスなロードムービーの記録。映像は沈黙を守り続ける。固唾を飲んで彼らの完走を見守っているかのようだ。しかし実際はそうではないのだ。その沈黙は何かを隠しているのだ。カメラは食べることができない。口という器官が言葉を発することと炭水化物を胃袋へと流し込むことを同時にできないように。

風能奈々 FUNO, Nana

「夢を見る夢を。それもまた現実なのだから。」
——W. B. イェイツ『対訳 イェイツ詩集』

例えば狼男が泣きながらピアノを弾いている光景があるとして、狼男は鋭い爪を丁寧に取り扱いながら鍵盤を叩いていたとして、どうして彼が泣いているのかばかりが気になって、彼の鳴らす音は全く覚えていない、そもそも鳴っていなかったかもしれない、そんな夢をあなたは見ているとして。しかしふとした瞬間にあなたは気づく。どうしようもなく気づく。狼男が泣いているのは自分のせいなのだ。夢を見ているときに私たちは何を忘れたがっていますか。何かを忘れようとしていたことだけは、覚えていたりはしませんか。

田中功起 TANAKA, Koki

「ある意味で、作家には自分の人生がないとも言える。そこにいるときでも、本当はそこにいないんだ。」「また幽霊ですね。」「その通り。」
——ポール・オースター『幽霊たち』

田中功起は未発表作を含む、過去作のほとんどを出品しています。映像の総時間は16時間ほどです。これはあくまでも仮の話なのですが、映像はだんだんと減っていて、最終日にはある決まった映像作品がずっとループしていることもあるかもしれません。（あくまでも可能性の話として）さて、映像の隣には、嵌め殺しの窓があります。イタリア料理店が見えます。冷めかけたスパゲティをフォークに巻きつけては、ため息をつく二人組がいたりします。私たちは窓をひとつ増やしました。

多和圭三 TAWA, Keizo

「世の中に片付くなんてものはほとんどありゃしない。一遍起った事は何時までも続くのさ。ただ色々な形に変わるからひとつにも自分にも解らなくなるだけの事さ」
——夏目漱石『道草』

多和はハンマーを振り上げ、無垢の鉄の塊の表面を叩き続ける。出品作は重さ600kgの2点組。しかし対ではなく、ふたつでひとつ。彼は3ヶ月それを叩き続けた。鉄が鉄のままではいられなくなるまで。（叩き終えたあと、彼自身もまた変化している）ずっと音は鳴っていただろうし、今後もきつと鳴ることがあるだろう。ちょうど偶然私たちはいま休符の上にいるだけなのだ。

小西紀行 KONISHI, Toshiyuki

「色とかいっぱいあってさ。」
——ドン・デリーロ『天使エスメラルダ：9つの物語』

身体が邪魔だなあとおもうそばから、もう君の手を握りたいとおもってる液体。近すぎる人に素直になれない液体。拭き取ることも描くことに含まれていると、混ぜることは区別することで、分けていくことは共有することだったと、知ったそばから、みんな自分が生きること必死な液体。

大和田 俊 OWADA, Shun

「ケッセルの平均寿命は一億分の四秒である。その数字を別の視点から考えてみよう。もし諸君が三十口径のライフルを十五メートル離れたところにある標的に向かって発砲するならば、銃弾が標的にあたるまでに、四六万二九六三世代のケッセルが生を終えている。」
——セス・フリード『大いなる不満』

太古の昔に息を引きとった生き物が石灰岩になっている。石が溶けると気体が発生する。展示空間の空気の配分がわずかに変化する。時間が固体と液体と気体を通り過ぎていく。でも君はそのままでいてください。

大城 真 OSHIRO, Makoto

「視覚で理解した形は、触ることで必ず修正される。」
——ジュゼッペ・ペノーネ

やってみて欲しいこと

- 糸にそっと（本当にそっと）触れてみる。糸のテンションが狂うので、つまんだり引っ張ったりはしないこと。
- 糸のそばに指をそっと近づけてみる。目では糸と指は触れ合っていないはずなのに、あなたの指は触覚を駆動させるかもしれない。
- 糸を注意深く避けながら、椅子に座ったり音源に近づいてみたりする。ただしストロボは直視しないこと。

百瀬 文 MOMOSE, Aya

「感じたことを直接伝えるどんな方法もないから」私は続ける。「すべての人が」「コミュニケーションをこの」「絶望からスタートさせるべきなのに」
——赤坂真理『ヴォイセズ』

記録。当初百瀬文には別の作品の出品依頼をしていた。しかし途中、彼女はこの作品を代わりに出すことを強く希望し、協議の結果作品を変更することにした。いくぶん大掛かりに思えなくもない小屋の存在は、当初出す予定だった作品に必要な条件を達成するためのものであった。世界は地平線の向こうまでもずっと個人の連続である。たくさんの声があった。